

## 17. こんにちは見習い魔法使いです！

各務原市立那加第三小学校6年

植田 なつめ 岩井 遥

前田 佳香 牧田 玲奈

↓

敦賀市立東浦小学校6年

北村 慎太郎 大道 沙也佳

田保 花菜絵 山崎 朋華 山本 智花

こんにちは。私の名前は「牧田なつめ」。

でもこれは人間界での仮の名前で、本当は「マジックマンス・タイム」。ずいぶん変わった名前でしょ。

実は私、魔法使いの見習いさんで、魔法の国「マジック・ナイト・ランド」って所から、修業のため家族で人間界に来たの。

「お姉ちゃん。お母さんが呼んでるよ。ローブ洗うから持ってきてって」

「ああ、またかー」

この子は私の妹で、名前は「マジックマンス・ムーン」。人間界では「よしか」。

小さいくせに魔法の知識だけは大人並みなの。

「お母さん。ローブはこの前洗ったばっかじゃん。あんまり洗うと、シワシワになっちゃうよ」

「何言ってるの。再来週、またマジック・ナイト・ランドで集会があるのよ。ローブをきれいにしておかないと、国王様の使者さんたちに、『クリーン魔法』かけられちゃうよ」

「あわわ、そりゃこわい……」

ということで、私はしぶしぶローブを出す。

とそこへ、ムーンが小走りで来て、

「お姉ちゃん。最近、学校に怪奇現象のうわさたってるの、知ってるでしょ」

「う、うん。たぶんあんなの、うそだよ！ うそ！ おばけや魔女なんかいないの！」

実は私、こわいもの大ッキライ。おばけとか魔女とか、大ッキライ。

「何言ってるの、お姉ちゃんその魔女じゃん」

「あっ……」

「まあ、そんなボケはどうでもいいの。でね、そのうわさの中に、いろいろ気になることがあるのよ」

どこから取り出したのか、ムーンは分厚い大きな本をぺらぺらとめくって何かをさがしている。

「あったー、これよ。『人間界の怪奇現象の九十五パーセントがマジック・ナイト・ランドの住人、または魔界からの使者』」

「魔界」っていうのは、マジック・ナイト・ランドが青色の魔法としたら、魔界は赤色の魔法で、血の色を意味する。魔界＝別名「地ごく」ってところかな。

「ここからが重要。『残りの五パーセントは、研究者も解明できていない、本物の怪奇現象である』どう？ 私、うわさの原因をつきとめたいわ」

すると、今までだまっていたお母さんが目を輝かせて振り返った。

「いいわね。怪奇現象探偵タイムとムーン。今夜学校へ乗り込んじゃいなさいな」

「わわっ、い、いやだよっ、私。そんな怪奇現象とか、原因も知りたくなんかないよっ。それに夜の学校とか、考えただけでいやだよっ」

私は必死になってのがれようとする。

けれどムーンもお母さんももう引こうとしない。

「いいじゃない。行きましょうよ。これも修業よ。ねえ、お母さん」

「そうよタイム。行ってきなさい。じゃないと『こうげき魔法』をタイムにかけろわよ！」

「う、わかったよ。もう」

ということで、私とムーンは怪奇現象の原因をあばきに、夜の学校へ乗り込むことになった。

ああ、いや。私とムーンは今、家の前。夜の九時にもかかわらず、真っ黒なローブをすっぽりかぶって、ムーンなんて大はしゃぎ。

「お姉ちゃん。持ち物確認よ。ローブは着てるわね。バッジはついてる？」

「あー、ちょっと待って。……うん、つけた」

私たちマジック・ナイト・ランドの住人はMマークのバッジをローブにつけるのが約束事。身分証明書みたいなものなんだから。

「つえ持った？」

「うん。あるよ」

「よーし！ じゃ出発ね。夜道は暗いので『ライト・アップ魔法！』さ、お姉ちゃんも。

『マジック・マンス・ライト・アップ！』」

これは暗い所を明るく照らす『ライト・アップ魔法』。

私たちみたいな子どもは、つえの先端を光らせる程度だけど。

私とムーンは、暗い夜道をつえの光を頼りにしながら歩く。

ムーンなんてスキップまでしちゃって、もう上機嫌。私はというと、ムーンの後ろにピッタリくっついて……。自分でもなさけないと思うよ。でも、こわいものはこわいし……。

「さて、いよいよ学校に着きました。私たちが待ち受けているのは、一体何なのでしょう？」

ムーンったら校門の前でレポーター気どり。

ギギギィー

とにぶい音がして、門が開く。

私の足は、もうガタガタ。

「あー、わくわくするわ！」

ムーンの声が夜の校庭にひびく。

ああ、もういや、いや。とその時、  
「お姉ちゃん、図書室が……。見てっ！」  
ムーンの小さいけどするどい声。ゆっくりとふり返ると……。  
わーっ！ あ、明りがついているじゃあない！  
「い、いや、まさか……。こんな時間に……？」  
私はガタガタふるえます。  
ムーンは？ さすがのムーンもこれには……とっていると、  
「行くわよ。お姉ちゃん。とっくに九時を過ぎているのに、校舎に明かりなんておかしいわ」

そう、そうだよ。おかしいんだよ。  
だからもう家に帰ろう……。でも、  
「めざすは図書室。さあ、行くわよ！」  
前にも増してやる気満々のムーン。ああ、もう。これだからいやなんだよ……。

カツン、カツン、カツン。  
私とムーンはいよいよ校舎に入りこんだ。  
現在地は二階。図書室は五階。  
はあ、もう何やってんだろ。小六と小二の女の子が夜の学校にしん入するなんてさ。  
なんて考えている間にもう五階。

わー、この階なんだよ。  
図書室は。ちらっとムーンの顔をのぞいてみると……。さすがのムーンも少しきんちょう気味。口元がひきつっている。

「ムーン……？」  
このろう下のつきあたりが図書室。私はムーンに声をかけた。  
くるっとふり返ったムーンは、下くちびるをきゅっとかみしめ、こくっとうなずいた。  
「やるよ！」という意味だろう。

私とムーンは、ついに図書室の前まで来た。  
私の足はガタガタ、ガタガタ。  
ムーンは図書室のドアを見つめたまま、ぴくりとも動かない。  
ーと、ふいにムーンが私の方を見た。  
また、下くちびるをきゅっとかみしめている。

「用意はいい？」  
ムーンの使った『感染魔法』でムーンの声が私の心にひびく。  
私はこくっとうなずく。

**ガラガラガラ！**

もうっ、心臓が止まるかと……。とまったかも……。  
いや、ムーンの大胆さにはびっくり。  
かっと目を、暗やみ……と言っても図書室だけど、目をこらしたムーンは、いつ、何が出てきても大じょうぶなように、つえを両手でにぎりしめてつきだしている。

どのくらいだったか……。

短いんだけど、私やムーンにもすごく長く感じた。

「何もないのかしら？ え、でも変ね。私達が学校についたころ、この部屋には明りがついていた……」

あっ、そ、そうだよ。ここは、明りがついていたんだよ……。

へ？ 何で消えてるの……？

もう私の頭は混乱しようたい。

「ふうー」

ムーンが小さくため息ついた？ とおもったら、静かに図書室の中へ入っていった。ちよ、調査だね……。

「まって！ おいていかないで！」

とムーンめがけて『感染魔法』。

でもムーンはかまわず行っちゃう……。しょうがない。

私も、つえをたてに、いよいよ問題の図書室に入る。

カツン、カツン……

私とムーンの足音が、だれもない図書室にひびく。

私はおそるおそるムーンの後ろを歩く。

ふと、気がつくと、ムーンがすごくはなれた所に！

「ああ、ムーン待って……」

そう言いかけたところで、

バタン！

えっ、私の後ろで本が落ちた……？

こわごわふりむくとそこには……。

「やー！ 出たー！」

もう、ありったけの声を出して私はさげんだ。

私の声を聞きつけたムーンが、パッと私の前にとび出した。

「出たわね。私達はマジック・ナイト・ランドの魔法使いよ！ 排除してやる！」☆

「いくわよ！ お姉ちゃん」

「う、うん…。あっ、まって！」

と私はムーンに叫んだ。

「なによ、お姉ちゃん！」

ムーンはいらいらしながら答えた。

「ひっ、人がいるわよ！ だれ？」

ムーンはとても不思議そうな顔をしていたその時、ぱっと、月の光が差し込んだ。

「お母さん？」

私とムーンは同時に声を出してしまった。

「あっ、あらー二人ともどうしてこんなところにいるの」

いつものお母さんがいた。

「お母さんこそ、なんでここにいるのよ」

「……、お母さんも行きたくなってきちゃった」

「そうなんだー」

また同時に声を出した。でも一つひっかかることがあった。

「お母さんって、こんな話し方だったっけ？ まあ、いいか」

「タイムとムーンこそなにしてるの？」

「学校の怪奇現象を探っていたの。お母さんが『行け』っていったじゃない！」

「あっ、そうだったね」

私は（今日のお母さん、なんか変だよ）と、ますます思った。

「それじゃあ、行こう！」

「うん……」

三人でどんどん前へ進んで行くと、また明かりがついている部屋を見つけた。私は思わず、

「ねえ、理科室の電気がついているよ」

とこわごわとムーンに話しかけた。

「さっきまではついてなかったのに……」

二人とも驚いた顔で向き合った。

お母さんはというと、ただニヤッと笑ってるだけだった。

「お母さん、怖くないの？」

私は聞くと、

「えっ、お母さんも怖いわよ」

と答えた。

やっぱりね、お母さんも怖いはず。

笑っていたのは、ただの照れ隠し。お母さんも強がってたって、やっぱり怖いんだ。

再び三人で廊下を歩き出した。理科室ももうすぐというところで、

「お母さん、ちょっとトイレに行きたくなっちゃった。先に行行って」

「うん、わかったよ」

とって、お母さんと離れ、私とムーンは理科室へ向かった。

だが、理科室の電気は消えていた。

「えーさっきまで電気ついていたよね、ムーン」

「とにかく行こうよ、お姉ちゃん！」

私たちは、電気の消えている理科室へ入った。と、その時、

ガラガラガラー

理科室の鍵が突然閉まった！

「キャー」

二人は大声で叫んだ。

「そ、そうだ、魔法でお母さんをお呼び」

私は魔法を唱えた。

しかし全く効果がない。二人はあわてはじめた。

「フッフッフッフ」

どこからか、声が聞こえてきた。

「だ、だれ？」

廊下の方を見ると、人影が見えた。私は大声で、  
「お母さーん、開けてよ。お母さーん」  
と叫んだが、聞こえてきたのは聞いたことのない声だった。  
「あなたたち、まだわかんないの！」  
「やっぱりね、お母さんじゃなかったのね」  
と気づくのもつかの間、にせもののお母さんは二人に魔法をかけた。  
目の前が突然明るくなり、全く知らない世界に変わった。

「こ、ここは、もしかして！」  
「そう、魔界だ！」  
二人は声をそろえて、  
「怪奇現象の正体はあんただったのね」  
と言った。魔物は自信たっぷりにこう言った。  
「もう君たちはもとの世界には戻れない。それはここで君たちを倒すからだ！」  
「倒せるものなら倒してみなさいよ」  
すごく強気に言ったけど、大丈夫かな。なんて言ってたら本当に倒されてしまう。  
「ムーン、知ってる魔法全部使うわよ！」  
あらゆる魔法を使ってみたが、魔物は手強かった。  
びくともしていない。二人は大ピンチ！  
「こうなったら、マジックマンズ家に伝わる伝説の魔法を使うしかないわね」  
私はムーンに言った。するとムーンは、  
「お姉ちゃん、本当にあの魔法使うの？ あの魔法はお母さんでも使うのが大変だよ」  
「そんなことはわかっているけど、ムーンはもとの世界に戻りたくないの？」  
「そうね、いちかばちかやるしかないわね！」  
魔物は一歩一歩私たちに近づいてくるのも気にせず、私たちは集中していた。  
「いくわよー」  
「必殺、パナメラック、パナメラック、ヤーー」  
魔法を唱えると、  
「うわあー」  
という叫び声とともに、魔物は一気に後ずさりし、姿を消していた。

とうとう二人は魔物を倒した！  
「やった！」  
と叫んだと同時に、さっきまでいた理科室に戻っていた。  
「怪奇現象の謎を解いたぞ！」  
「さあ、ムーン。家に帰ろう。やっぱり解明できない怪奇現象はないだよ。これでお母さんに話しができるよ」  
私はいい気分で帰っていった。

学校を出て、ふと校舎をふり向くと、屋上から手を振る謎の人影が見えた。

「ぎゃー」

と二人は叫びながら、かけ足で帰っていった。  
結局、怪奇現象の謎は、まだ解けていない……。  
二人の怪奇探偵はまだまだ続くのであった。